

今後の腎代替療法への期待 —延命から、生活の質を重視する医療へ

鶴屋 和彦*

わが国の透析医療は、世界でも屈指の生命予後を実現しています。しかし、われわれが目指すべきゴールは、もはや単なる延命にとどまりません。超高齢化の進行により、腎代替療法は自立困難な患者に対する延命的治療としての側面がいつそう強まっている一方で、活動的な生活を希求する患者にとっては、QOLを最大化し、透析を生活の「中心」ではなく「背景」へと位置づけるパラダイムシフトが、今後の重要な課題となっています。

まず、現行療法の最適化において、「透析時間」と「濾過」の重要性を再認識する必要があります。透析時間は生命予後とQOL改善の有意な関連因子ですが、施設透析における時間延長にはさまざまな制約も多く存在します。その中で、大容量前希釈オンラインHDFは、通常の血液透析と比較して総死亡リスクを有意に低下させる効果が示されており、生命予後改善のためのきわめて現実的かつ有効な解といえます。

さらに、今後の大きな期待として、吸着再生技術の進化により物理的な拘束からの解放をもたらす「ウェアラブル人工腎臓（WAK）」の実用化が挙げられます。すでに実施された臨床試験では、24時間の連続かつ緩徐な透析が、正確な除水制御と血圧の安定をもたらすことが実証されました。特筆すべきは、患者満足度の圧倒的な高さです。透析が日常生活を妨げる「イベント」ではなく、無意識下で

* 奈良県立医科大学腎臓内科学

行われる「生理的な営み」に近づくことで、患者の自由度は飛躍的に向上します。また、腹膜透析領域における再生式ウェアラブルデバイスの開発や、異種腎移植（遺伝子改変ブタ）の臨床応用も現実味を帯びてきました。

技術革新は、透析患者を「治療を受ける客体」から「人生を生きる主体」へと回帰させる力を持っています。腎代替療法は、単なる生命維持の手段から、より良く生きるための手段へと進化し続けているのです。われわれは、技術の進歩を追い続けるとともに、治療の多様化に伴う倫理的な課題や、医療経済的な側面についても真摯に向き合わなければなりません。最終的には「透析をしていることを忘れる」レベルまで治療を昇華させること、個々の患者の価値観と治療への期待を尊重し、「最良の QOL」をともに追求していくことが、新時代の腎代替療法におけるわれわれ医療従事者の責務であると考えます。それこそが、新時代を担うわれわれ専門医に課せられた使命であり、技術と情熱を注ぐべき終着点であると確信しています。